助詞論二題

金田一春彦

一　係助詞の二類

橋本進吉博士は、「係助詞」の例として、次のような語を挙げている。[注1]

「は」「も」「こそ」「さえ」「でも」「なりと」「しか」「ほか」。

この中には、二種類のかなり違ったものが混在していると思う。

一つは、名詞を修飾する連語の中に使うことができるもので、「も」「さえ」「でも」「しか」などはそれである。南不二男氏の術語[注2]を使えば、「句」の中におさまり得るものである。

根も葉もないこと。

三日も降り続いた雨。

月さえ細い春のくれ（西条八十）。

何でもできる人。

仮名しか書けない人。

もう一つは、「句」の中には、おさまらず、南氏の「節」の中ではじめて使えるもので、「こそ」は代表的なものである。山田孝雄博士が「係助詞」と呼んだ助詞は大体そういうものを主として考えたはずで、たとえば「ぞ」「なむ」などもその例だった。その意味で

をとめぞ経ぬる大方の我は夢路を越えてけり（島崎藤村）。

という用法は古格に外れていた。

注意すべきは、助詞のうちには、意義によって二様に使われるものがあり、例えば、「は」は対比を表わす場合は、句の中におさまるが、主題を表わす時は、節の中にしか使われないことはよく知られている。「も」も「同様に」という意味を表わす通常の使い方の場合は、前に掲げたように句の中に入るが、漠然と感動の意をこめて使う場合は句の中にはおさまらない。

あなたもけっこう計算高いな。

亭主も亭主だが、女房も女房だ。

この、句におさまる係助詞と、節でなければおさまらない係助詞の間には、意義の上にも相違があるようだ。句の中に入るものは、客観的な事実を述べる助詞で、

根も葉もないこと＝根、葉ともに同様にないこと。

何でもできる人＝すべてのことができる人。

女は乗せない戦車隊＝男だけを乗せる戦車隊。

これに対して、節でなければ入らないものは主観的な事実を述べる助詞で、「こそ」「ぞ」の類が強調という主観的な意味をもつ助詞であることは言うまでもない。主題を表わす「は」は、客観界には主題というものはないわけで、人間がその中から何かをえらんで主題とする、つまり「は」も主観を表わす助詞の一種と見られる。

私はかつて、松下大三郎博士にならって、助詞のうち、文末助詞と間接助詞は主観的なものを表わすと見たが、ほかの助詞については、言及しなかった。[注3] 以上のように見るならば、いわゆる「係助詞」のうちには、客観的な意義のものと、主観的な意義のものとが混在していたことになる。

そうして、係助詞の第一種の方は、副助詞などに近いものであるが、第二種の方は、文末助詞に近いものということになる。こういうちがいが認められるとすると、係助詞は二分した方がよいのではなかろうか。

注1　橋本進吉「国語法要説」（『橋本進吉博士著作集』第二巻）七六ページ

注2　南不二男「文論の分析についての一つの試み」（『国語学』43）八六ページ

注3　金田一春彦「不変化助動詞の本質」（上）（『国語国文』22の2）七二ページ。「同」（下）（同22の3）三五ページ

二　主語か目的語か

柴田方良氏の『日本語の分析』（三五一ページ）にこんな例があがっている。

(ア)　私は山田先生が好きだ。
　　主語
(イ)　私は山田先生がなつかしい。
　　主語

よく似た文脈であるが、(ア)と(イ)とで主語が違うと見たのは、尊敬表現をとった場合、違いが現れることを根拠としている。

(あ)*　私は山田先生がお好きだ。

(い)　私は山田先生がおなつかしい。

(あ)は言えないが、(い)は言える。随って(ア)は「私は」が主語であり、(イ)は「山田先生が」が主語であると見ている。

柴谷氏は、この本でこの両者を同じ文型と見たいようである。も

っともである。そうして両方ともできるならば、「私は」を主語と見、「山田先生が」を目的語と見たい意向のようである。これは不可能ではない。

松下大三郎博士や三上章氏は、日本の尊敬表現に、主体尊敬と客体尊敬とがあると見た。客体尊敬とは、「お目にかかる」や「お慕いする」の例で、学校文法でいう謙譲表現である。つまり、普通の

(う) 山田先生はお美しい。

ならば、主体尊敬であるが、

(い) 山田先生はおなつかしい。

は客体尊敬と見るのである。その証拠に、(う)の方は

〔う〕 山田先生は美しくいらっしゃる。

と言えるけれど、い(の)方は、

〔い〕 *山田先生はおなつかしくいらっしゃる。

は変で、

〈い〉 山田先生はおなつかしゅうございます。

が適当である。一般に、日本語の形容詞には、「慕わしい」「羨ましい」「いたわしい」「気の毒な」のような「お」をつけると客体尊敬になるものが多い。形が同じであるから、主体尊敬と紛れるが、意味から言って、尊敬すべき人に対する感情を表わす単語である。この「おなつかしい」は「私は」を受けたとしてちっとも矛盾しない。

以上のように考えるならば、

(ア) 私は山田先生が好きだ。

(イ) 私は山田先生がなつかしい。

の二つは同じ種類の文型で、(イ)の主語も(ア)と同じく「私は」で、「山田先生が」はともに目的語だと言うことはできる。

× ×

もっとも、これは柴谷氏の論に立って述べればこうなると言うまでのことで、私は(ア)の文も、(イ)の文も「私は」を主語とすることに賛成しない。この行き方を進めてゆくと、

(エ) 私はあの子がかわいい。

(オ) 私はこの本がおもしろい。

という形を経て、

エ あの子はかわいい。

オ この本はおもしろい。

の「あの子は」「この本は」は主語ではないことにならないだろうか。また、

(う) 私にはあの人が美しい。

という言い方も言えそうな気がする。

(ウ) あの人は美しい。

の「あの人は」どうだろうということになる。どこで収集がつくのだろうか。私には、「が」のつくものがすべて主語だとする、橋本進吉博士や佐久間鼎博士の旧説の方が、日本語にはよいように思われる。

——上智大学教授——

(昭和五十八年二月二十四日　受理)